

# 令和3年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区 名	港区
学 校 名	大阪市立市岡小学校
学校長名	中谷 和博

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和3年5月27日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育局の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

## 1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## 2 調査内容

### (1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数

### (2) 質問紙調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

## 3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・小学校では、第6学年 87名

## 令和3年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語・算数とも、全国平均、大阪府平均、大阪市平均よりも結果は低くなった。

### 【国 語】

#### 1. 平均正答率の比較

	平均正答率(%)
市岡小学校	60
大阪市（公立）	63
大阪府（公立）	63
全国（公立）	64.7

### 【算 数】

#### 1. 平均正答率の比較

	平均正答率(%)
市岡小学校	63
大阪市（公立）	69
大阪府（公立）	70
全国（公立）	70.2

## 分析から見てきた成果・課題

教科に関する調査より

### 〔国語〕

- 従来よりの課題であった「漢字」・「主語と述語の関係」・「修飾と被修飾」については、一定の成果をあげている。
- 「思考・判断・表現」の力を問う問題の正答率は、大阪市・大阪府・全国平均と比べて下回っている。特に「目的や意図に応じ、資料を使って話す」ことや「文章全体の構成を捉え、内容の中心となる事柄を把握する」こと、「目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約する」こと、「自分の主張が明確に伝わるように、文章全体の構成や展開を考える」ことは開きが大きい。

### 〔算数〕

- 「数と計算」・「図形」・「測定」・「変化と関係」・「データの活用」とすべての領域において、課題が見られる。
- 「数と計算」では、小数を用いた倍についての解釈が不十分なため、基準量を1としたときに比較量を小数で表すことが十分に認識できず、自分で考えることができていない。また、各種の計算を日常生活の中から考えることが苦手なため、求めた解答がただしいかどうか判断できないという傾向がある。
- 「図形」では、複数の図形によって構成された平行四辺形などの図形の面積を求めるために、図形の構成の仕方をとらえることが不十分である。
- 「変化と関係」では、速さを求める除法の式と商の意味が十分に理解できていない。
- 「データの変換」では、各種のグラフから必要なデータを読み取ることはできているが、複数の資料からどのデータを活用すればよいのか判断すること、項目間の関係を読み取ること、データを分類整理すること、複数のデータを比較検討すること、適切に割合で表すことなど、すなわち、どのように抽出し、変換し、活用するのかということが不十分である。

これらの結果から、本校の授業が、知識偏重のものであり、新しい学力観に基づく授業の構築が遅れているという認識を、本校のすべての教員がもって1年生から取り組んでいく。

- 平日に4時間以上テレビゲームをしている児童が、全体の30%（人数にして28名）いて、全国平均と比べ約15ポイント、大阪府と比べても約10ポイント多い。午後4時の下校後、宿題と夕食と入浴を除いて、ほぼすべての時間ゲームをしているということがわかる。
- 自己肯定感に関する「自分には、よいところがあると思いますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という肯定的な回答をした児童が、およそ3分の2（58名程度）いる一方で、「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」と否定的回答をした児童が、およそ3分の1（29名程度）いて、これは全国平均よりも約10ポイント高い。自己肯定感が低い児童の割合が本校では大きいことを示している。
- 「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」という質問に対しては、「どちらかといえばあてはまらない」と回答した児童が20名いる。すぐにあきらめてしまいがちな傾向が見受けられる。周囲のおとなの適切な支援のもと最後までやりぬく体験を行っていく必要がある。
- 「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか」という質問に対し、否定的回答をする児童が、およそ35%いる（30名程度）これも周囲からの適切な励ましや支援によって、肯定的な回答をする児童が増えていくと思われるので、学校だけでなく家庭・地域も連携して支えていく必要がある。また、がんばったことややり遂げたことをタイムリーかつ的確に評価していくことが重要である。
- 5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか否定的な回答をしている児童が45%程度（およそ40名）いる。本校の授業の姿が浮き彫りになっていると考えられる。この割合が減るような授業を全学年で行っていかねばならないと考える。
- 「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問に対しては、否定的な回答をしている児童が35%以上いる。全国平均と比べて15ポイント否定的回答が多くなっている。この割合が減るような授業を全学年で行っていくことは、学力向上に向けての喫緊の最重要課題である。
- 「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という質問に対しては、否定的な回答をしている児童が35%以上いる。全国平均と比べて10ポイント以上、否定的回答が多くなっている。この割合が減るような授業を全学年で行っていくことは、学力向上に向けての喫緊の最重要課題である。まずは、この質問に対して肯定的に答える児童の割合を増やしていくことが、授業づくりの1丁目1番地である。
- 「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問に関連して考えると、学習指導要領において文部科学省が提唱している「総合的な学習の時間」はこのようなものです。今、本市で行われようとしている「読解力の育成」に特化した「総合的な学習の時間」は、本当に自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するものにしなければなりません。その点から、どのようなカリキュラムが打ち出されるのか、注目すべきところです。

## 今後の取組(アクションプラン)

本校のすべての教員が、新しい学力観に基づく授業づくりや、学校の取組をさらに進めていく。

### 〈国語科〉

○ 「漢字」・「主語と述語の関係」・「修飾と被修飾」など、言語に関する基本的な事項の学習は今後も行っていく。

○ 一人一人が「調べる」「見つける」「話し合う」「発言・発表する」授業へと変革していく。

○ 読解力の育成に努める。特に、文章全体の構成を考え、内容の中心となる事項を把握することや、目的に応じて文章や、図表などの資料を結びつけて必要な情報を見つけること、要旨を条件に応じてまとめていくといった活動を重視する。

○ 自分が見つけたことや考えたことを、言葉や文章で「わかりやすく」表す活動を積極的に行っていく。また、「わかりやすく」伝えるために、言葉や文章の構成や展開を考えていく活動に取り組む。

### 〈算数科〉

○ 基本的な計算をドリル形式で続けていくことは今後も続けていく。

○ どうやって考えたのか、なぜそのように考え求めたのかなど、自分の考えを、根拠を明確にしながら説明したり、文章で書いたりする時間やそれをわかりやすく説明する活動を、積極的に採り入れていく。

○ 単元の内容によっては、評価テストの前に、習熟度的に対策問題に取り組む時間を設け、問題の意図を読み取るスキルを高めていく。

### 〈その他の時間〉

子どもたちの読解力、思考力、表現力の育成のために、以下のようなことに1年生から取り組んでいく。

○ 学校全体で読書活動を推進する。その際、児童がより読書に親しもうとする読書貯金などの取組を行う。また、自分が読んだ本を、より多くの人に勧めて読んでもらえるよう、あらすじや要点をまとめた紹介文を書く活動を採り入れる。

○ 低学年の段階から、読み聞かせや聴写・視写に取組み、感想を述べる力や聴く力、見る力を伸ばしていく。

○ 相手の会話の内容を理解する力が必要なので、朝の会や終わりの会のときに、昨日のことや今日楽しかったことなどを言う 交流の時間を持ち、さらに、

話した内容に関することやそこから連想されることなどに関するクイズを出すなどして楽しみながら話す力、聴く力を高めていく。

○ 高学年では、新聞記事を要約したり、感想を書いたりする活動を通して読解力を高めていく。

○ 現在習っている問題を、宿題・課題として出すだけにとどまらず、既習したことを活用する力をつけさせるために、前学年で習った問題なども宿題・課題にしていく。

○ 何枚かの絵から、お話を作るといった表現につながる取組をする。

○ 理科や社会科では、学習したことを新聞形式でまとめるような活動に取り組む。その際には、グラフや資料を適切に使用したり、空想インタビューを入れたりしていく。

○ 学級活動における話し合い活動を活性化させる。(司会の仕方、意見の出し方、話し合いのルールなどを作って取り組む)